

熱性けいれん (ひきつけ) !

☆熱性けいれんとは？

38℃以上の熱にともなって起こるけいれん(ひきつけ)です。多くは熱が出て24時間以内に起こります。髄膜炎や脳炎などのケイレンを起す原因となる明らかな病気が無いものを言います。日本人の10人に1人くらいにおこるありふれた病気です。主に6か月から6歳におこり1～2歳にピークがあります。また、両親、兄弟に熱性けいれんがあることも多いです。

熱性けいれんはてんかんではありませんので、脳波、MRI等の検査は必要ありません。

☆症状は？

①**単純型(70%)**：急に体が硬く突っ張ったり、ガクガクしたりします。顔色が悪く、目が固まり動けなくなり、呼びかけても反応しません。多くは5分以内に自然におさまります。

②**複雑型(30%)**：①全身でなくケイレンが体の一部のみにおこる ②発作が10分以上つづく ③24時間以内に繰り返し起こす のいずれか一つ以上がある場合を言います。

☆ひきつけが起こったら？

いちばん危険なことは、吐いたもので息が詰まることです。落ち着いて子どもを横向きに寝かせ、呼吸が楽な姿勢でひきつけが止まるのを待ちます。10分以上続くときには救急車を呼ぶことを考慮しましょう。

☆再発予防は？

37.5℃を越えた時に予防薬(ジアゼパム坐薬)を挿入し、発熱が続いていれば8時間後再び挿入します。

通常、最終発作から2年間もしくは6歳になるまで予防を続けます。

単純型熱性けいれんの半数は一度しか発作を起しません。予防が必要なのは！

- ① 発作が15～20分以上続いた場合
- ② 1；1歳未満の発症
- 2；熱性けいれんの家族歴
- 3；ひきつけを起す以前から運動や精神発達の遅れがある
- 4；複雑型熱性けいれん
- 5；てんかんの家族歴(両親、兄弟)

この5つの項目のうち2項目以上にあてはまり、また過去に2回以上発作を経験している。

- ③ 短期間に発作が頻発する場合(例；半日で2回、半年で3回以上など)

この3つのいずれかに当てはまる児です。

☆熱性けいれんを起したことがあるけど、予防接種は？

単純型、複雑型の区別なく予防接種は受けることができます。

ただし、ケイレンの時間が長かった場合は、小児科または小児神経医の指示に従いましょう。

熱性ケイレンはありふれた病気で、むやみに恐れる必要はありません。心配なことがあれば、かかりつけの小児科医に相談しましょう。